

No.

ご意見の内容及び理由 ※個人情報や基本構想に関係のない内容を含む場合は、一部削除・修正をしておりますのでご容赦ください。

新幹線が通るから観光客向けに氣比神宮・神楽・金ヶ崎を整備、県から求められていることかもしれませんが、新幹線効果は長く続きません。来教者は増えているようですが、教賀駅は所詮乗換口と捉えている方が多く、教賀駅から市内に出ずに通過する方も多いようですね。

教賀駅から氣比神宮までは徒歩20分。徒歩20分とは都会では歩くのに苦が無い距離ですが、それは道中小さくてもお店が点在していたりと景色が大きく変わるから苦が無いと感じて歩けるのではないのでしょうか。田舎の20分はただの車道横・シャッター商店街となんの楽しみもなく、目的地がただただ遠く感じます。ましてや金ヶ崎まで…などと構想された方は普段から相当市内を歩き回って移動されている方だったんでしょかね。まずその時点でこの車社会である教賀市民とはかけ離れた考えの方なのかなと想像します。ちなみに教賀駅から氣比神宮へ向かうために商店街を通らせないと思惑は裏腹に、一本駅側のエフレのある道を通る方も多いようです。これは名物で売り出しているヨーロッパ軒があるからかもしれませんね。

教賀市をGoogleマップで上から見た図は一方が海、残り三方が緑。緑の中に点在する住居はあれどコンパクトにまとまっている街なのに、一体感が全く感じられません。街を「ひとつ」として見ずにエリアごとによってその時々で何かをやった感を出してきた結果が今のまとまりの無さに通じてる気がします。人の感情が入るのもありますが、神楽周辺にのみ重点的に補助金を使用した施策を行っている点もそうですよね。

1 今回の意見募集にはそぐわない内容かもしれませんが、氣比神宮周辺だけではなく「教賀市」全体として構想を練る機関を置きませんか？外部を入れるのも良いですが、メインは市内の人間を中心として。

上記を前置きとして、氣比の杜整備構想(案)について。主には「地元の住民」+次いで「観光客」という策定を行わない限り、新しいガワを行政で作って民間に流して衰退、の流れは今後もループし続けそうですよね。移動方法は主に車やバス、レンタサイクルなどの徒歩以外を想定して、住民の多い粟野エリア、中央エリアなど街全体を含めた活用を検討して頂きたいです。

歴史を学びたいのなら市立博物館、図書・勉強スペースを充実させたいのなら市立図書館などのアピールや改修など、既存の施設に力を入れたら良いのではないのでしょうか。

2008年の金ヶ崎や先日もあったように、強風が多い街でもあります。天候に左右されずにイベントを行えるスポットとして、きらめきみなと館や萬象・文化センターとは違った屋内施設を増やすのめいかげでしょうか。大阪城付近のようなイメージで、健康遊具が多く設置された公園・芝生スペース・ライブも行えるイベントホール・民間が入れる店舗を揃えた施設など、もちろん周辺含め駐車場を揃えた上で。また高浜のLUMIKARA、美浜のはまびよりといったように地元住民が普段使いするスーパーマーケットの機能を備えた施設など。

全ての意見を取り入れるのはもちろん難しいことと思いますが、「教賀市全体」として・ターゲットのメインは「地元の住民」、次いで観光客、という大筋で動いて頂けると今後の教賀市に期待が持てるかと思えます。

2 基本計画を作るときには、先進事例調査をした施設の整備にかかった経費を併記して、教賀市でも可能な施設であるのかわかるようにしてほしい。理想ばかりで現実感がない。コミュニティ機能が必要なのはわかるが、どの公民館も大きすぎると思うので、複合施設となるのであれば、コンパクトな形で経費をかからないようにしてほしい。複合施設なので、お互いに兼用できるはず。導入すべき機能の50-70代が希望する、文化的な機能では、観光客向けに地域の魅力等を発信する、新たな交流や賑わいを創出することは困難であると思われるので、出来る限り小さくしてほしい。

「基本方針(コンセプト案)」を拝見しました。ワークショップでの意見を整理し、分かりやすくまとめて下さりありがとうございます。財政の枠や 様々な立場からの申すものなど、制約の多い中でのご苦労が伺え、心から感謝いたします。しかし、教賀を愛する一市民として、改めて以下の二つを再提案させて頂きたいと思えます。

1. 「松尾芭蕉」記念館の創設
- ・「松尾芭蕉」は、小学3年生から中学3年生までの教科書にも登場しており知らない者はいないほどに有名。
 - ・その芭蕉が教賀で過ごし、神楽町を歩き、氣比神宮へお参りしたという史実。
 - ・更に、教賀で詠んだという句が10句ものこっている。(そのうち、「おくのほそ道」には4句が掲載)
 - ・種が浜(色が浜)を訪れ、その時の様子を書き残した「色が浜遊記」は教賀市文化財指定。
 - ・「おくのほそ道 素龍清書本」(国重要文化財指定)が 教賀市新道に住む西村家に現存する。
 - ・杖をおき(大垣までは馬で)、5か月にも及ぶ「おくのほそ道」の旅は教賀で終了。
 - ・「杖措きの地教賀」としての杖が残されている(市文化財指定)。
- 3 上記のような史実が、しっかり資料としても残っている全国的に有名な「松尾芭蕉」です。未だに光が当たっていないのは、教賀市としても恥ずべきことと思うのです。氣比神宮に友人たちを案内しても「これだけなの」と必ず問われて悔しい思いを何度もしているのが現実です。是非とも「芭蕉記念館」の創設を祈念いたします。なお、建屋は、多目的建築物の一角にではなく氣比神宮からよく見える位置に独立して設置されますよう切望いたします。
2. 防音装置が完備された 小さなホールの設置。(300~500人ぐらいの収容)
- ・知人から音楽や朗読劇などを発表する場がなくて困っているのをよく聞きます。
 - ・市民が簡単な手続きで借りることのできるホールを多目的な建物の一角でいいので設置してほしい。
 - ・なお、災害時にも利用可能な工夫をすれば 一挙両得かと。

「氣比神宮」・「氣比の杜」。声に出してもいい響きです。教賀の誇りである氣比神宮の横に「氣比の杜」が広がる完成構図を想像すると、子どもたちや孫たちへ残せる財産としても素晴らしいなとうれしくなります。よろしくご配慮いただけますようお願いいたします。

No.

ご意見の内容及び理由 ※個人情報や基本構想に関係のない内容を含む場合は、一部削除・修正をしておりますのでご容赦ください。

市民ワークショップの後にアンケートが実施されましたが、設問五の(2)で将来的に必要な施設について、具体的な施設のイメージができるもの(公民館・図書館の分室・学習スペース・ギャラリー)とあり、その中の最大3つまでにチェックとありました。しかし、ワークショップで何人かから要望のあった“芭蕉記念館的な施設”の項目は見当たらず(市の歴史に関する展示スペース)との漠然とした表現にとどまっています。その後12月市議会中の新幹線開業後まちづくり特別委員会を傍聴して、資料を頂きました。その中には、様々な機能を有する地域コミュニティセンターを整備し、その内部の一角に芭蕉や氣比神宮に関する学習ができるコーナーを設置する想定がされている記述が見られます。しかし、率直に申し上げますとこの案には賛同できかねます。新幹線開業後に、着実かつ安定的に来訪者の増加数が一定数キープされているのは氣比神宮だけです。最初に視点を据えるべきは、氣比神宮を訪れる年間120万人の人々に対してではないでしょうか？

「氣比の杜構想」は、単に廃校跡地の再開発という単純なものではなく、敦賀市のまちづくりに百年先、いやそれ以上に決定的な影響を与えうる重要な案件です。旧北小学校跡地は、明治4年に全国の神社が国家管理となり、それが昭和20年の終戦まで続くわけですが、それ以前は悠久の昔から氣比神宮の神域でした。この多数の人が訪れる氣比神宮の境内には

- ・国指定「おくのほそ道風景地・けいの明神」
- ・日本100名月プロジェクト登録番号061号「氣比神宮にのぼる月」
- ・芭蕉ブロンズ像 敦賀信用金庫創立費50周年記念
- ・芭蕉翁月5句碑 ライオンズ国際協会 第42回年次大会記念

など数々の記念碑などが存在しており、氣比の杜の一角に「芭蕉記念館(仮称)」が建つ要件を十分に満たしています。

月をこよなく愛した俳人芭蕉が、仲秋の名月の前日に敦賀に入り、名月の句を詠むことにより、2400kmに及ぶ奥の細道の大旅行の区切りとし、実質的な旅を終えたと感じたからこそ、この敦賀の地に傘と杖を残したと思われる。これはまさしく、奥の細道“最終章”の“物証”であり、傘は消失しましたが、杖は現在も敦賀市指定の文化財となっています。

「氣比神宮大鳥居」は日本三大鳥居の一つであり、「氣比の松原」は日本三大松原の一つ。日本三大〇〇が二つもあるのは当市敦賀市だけです。しかもこの二つには関連があり、「氣比の松原」は氣比神宮の神苑であるという密接な関係です。氣比神宮前参道にあたる神楽通りは、当市が進める新幹線開業後のアクションプログラムの一環としてこの4月に道路空間整備工事が完了しました。その神楽通りの舗装には砂を連想させる素材が使われております。これは芭蕉の句の題材にもなった「お砂持ち」の故事に由来するもので、神楽通りはまさしく芭蕉が氣比神宮で月見をするために実際に歩いた通りであります。

まちづくりとは本来、その土地の持つ宝を大切にそこにストーリー性を持たせ、地域の住民が語り継ぎ、顕彰するための手段であります。「氣比の杜構想」の内には「芭蕉」という不変・不朽の価値を、そこを訪れる人に「芭蕉記念館(仮称)」という目に見える形で示す目的も含んでいます。この記念館整備が実現すれば、それはあたかもジグソーパズルの最後のピースがはまるように、周辺のインフラも輝きを増すことでしょう。

名刹西福寺の基地には、白崎琴路が眠っています。琴路は敦賀での芭蕉の顕彰に貢献し芭蕉忌には金前寺に句碑を建立し記念句会を開催した敦賀俳諧の基をなした人であります。

月いづこ鐘は沈る海の底 芭蕉

沈鐘の句として親しまれるこの句は毎年墨入れがされ多くの人の目を引き寄せています。

ふる池や蛙飛びこむ水の音 桃青

この句に始まる芭蕉の句は「おくのほそ道」等と通して今や俳句は日本から世界へと広まっています。そして、江戸・深川を出発して「おくのほそ道」は敦賀が「杖橋の地」となったのです。自身の手足を頼りにみちのくの歌枕を訪ねた約五カ月間、距離およそ二四〇〇キロの旅、様々な感慨から会得したのが「不易流行」という不滅の理念でありました。敦賀の地においても多くの活動の場をみることができた芭蕉さんのことを広く知らせたいという思いから「子どもたちの心に芭蕉さんを」を合い言葉にして、私たちのパシヨさん会は誕生しました。二十年近い年月が過ぎましたが、その間「おくのほそ道」の紙芝居作りや芭蕉が敦賀で詠んだ十句のポスター等を作り市内の各小学校や施設へ配布しました。そして、それらをもとに学校を訪問して紙芝居や俳句の授業をしたり、展示会場をお借りして資料の紹介もしてきました。

平成二十八年に氣比神宮は「おくのほそ道風景地・けいの明神」として国指定を受け、令和三年には氣比神宮にのぼる月が「日本百名月」に指定されました。芭蕉ブロンズ像、芭蕉翁月5句碑は本殿前の姿として定着しています。私たちの活動の上に、このように映える指定の輝きをみるにつれて、是非とも今回の「氣比の杜構想」の中に活動の館を入れて頂きたい願いを持つようになりました。芭蕉の世界を追ったり調べたりできる専門の館があればどんなにいいだろう。もちろんその中には、パシヨさん会作成の資料も備えられるのですから訪れた人々の参考となるにちがいありません。また、港町敦賀にはクルーズ船が、年に何度も周航します。停泊中には氣比神宮を訪れる人々も大勢いらっしゃいます。その時神社の近くに芭蕉の館があればどうでしょう。日本と外国の人々が共に芭蕉の世界を楽しむ姿を想像するだけで胸が高なります。

～文化の殿堂～打ち立て～
これは敦賀高等学校の校歌の一節です。文化の殿堂ってどんなのだろう…。敦賀に文化の殿堂はあるのだろうか…。それが今にして文化の殿堂がここにあることによりやく気づいたのです。パシヨさん会での活動や資料、今後のさらなる実践等を次の世代へ引き継ぐことこそが文化の殿堂づくりに思ひ至りました。芭蕉庵が質素であったようパシヨさん会の館も質素でよいのです。芭蕉の文化を未来へ引き継ぐ殿堂づくりを会員一同目指したいと思います。芭蕉文化が敦賀の館から国内外へ発信されるチャンス到来！

昨年9月末に福井新聞の「氣比の杜構想」に関する記事を読み、ずっと気になっていました。「市民ワークショップ」や、「市民アンケート」が実施されていたということを知ったのは、今年の2月頃だったと思います。市のホームページではそういったことも公開されていたのでしようけど、アナログ人間に分類されてるような私には伝わってきませんでした。知人から、「氣比の杜整備構想(案)概要版」や「基本方針について」などの資料コピーを見せてもらい、意見募集中とも聞きました。

基本方針「歴史・文化振興」について
敦賀や氣比神宮、松尾芭蕉の魅力が市民が再発見し、国内外へ発信する拠点施設とすることを目指します。と記されていて、松尾芭蕉をしっかりとアピールできると嬉しく思いました。が、導入機能の検討を見ていくと、文化機能・コミュニティ機能を「探求・創発エリア」として融合的に整備し、コミュニティセンターという大きな建物中に、敦賀や松尾芭蕉、氣比神宮に関する学習や史料の閲覧ができる機能「アーカイブ機能」の一部屋が設置されるような感じに受け取れました。しかも展示は小規模なものとし、興味に応じて・・・他施設に誘導することを重視、と記されています。

これでは松尾芭蕉に関連する施設を優先的に整備したい施設としてあげていたワークショップ参加者の声に応えられないのでは？松尾記念館のようなものをと以前から願っていた人々もたくさん居ます。氣比の杜整備の今だからこそ、奥の細道の旅の最終章に、この敦賀を訪れた松尾芭蕉の記念の館についてお考えいただければと思います。